

新任副部長を紹介します



循環器科副部長
さざわ かつひこ
血澤 克彦

卒業年次／平成12年
専門／循環器一般
資格／日本内科学会認定医、
日本循環器学会専門医
趣味／読書、ガーデニング



小児科副部長
おくら かずまさ
小倉 一将

卒業年次／平成13年
資格／日本小児科学会
専門医、日本小児科学会
認定医



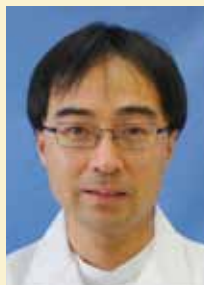
形成外科副部長
じんの ちづる
神野 千鶴

卒業年次／平成15年
資格／日本形成外科学
会形成外科認定医



皮膚科副部長
なかがわ ゆうじん
中川 雄仁

卒業年次／平成15年
専門／皮膚外科、乾癬、円
形脱毛症、下肢静脈瘤
資格／日本皮膚科学会認
定皮膚科専門医
趣味／音楽、スキューバダイビング



腎臓・泌尿器科副部長
かたの けんいち
片野 健一

卒業年次／平成7年
専門／腎臓内科
資格／日本内科学会認定内
科医・総合内科専門医、日本
腎臓学会腎臓指導医・専門医、
日本透析医学会指導医・専門医



放射線科副部長
やまだ あつし
山田 篤史

卒業年次／平成13年
専門／診断、IVR
資格／日本医学放射線
学会専門医
趣味／旅行

地域医療連携課の スタッフが新しくなりました。

平素より連携医の先生方には、当院の連携業務に対して格別のご協力、ご支援をいただき厚くお礼申し上げます。

当院の地域医療連携課は、連携医の先生方からご意見、ご要望をいただきながら一步一步確実に歩んでまいりました。また、この4月から地域医療担当の総括に長谷副院長が着任し、メディカルソーシャルワーカー（MSW）を一名増員し、更なる体制整備を進め連携推進に努めているところです。

常に地域の医療発展を考え、患者さんを中心に先生方と共に連携しながら福井赤十字病院としての役割を果たし、さらなる地域医療に貢献してまいる所存です。

連携医の先生方には、今後も引き続き、ご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願い申し上げます。



緊急のご案内！

ストレス診療科の 診療体制について

当院では、4月より常勤の精神科医師が不在になることから、誠に勝手ながら、通常の外来診療を休止とさせていただきます。入院患者さんのみの診療といたします。何卒ご了承くださいようお願いいたします。

なお、ご不明な点は、地域医療連携課までお問い合わせください。

地域医療連携課

受付時間／平日 8:00～18:30
土曜 8:30～12:30
TEL 0776・36・4110（直通）
FAX 0776・36・0240（専用）

福井赤十字病院

<http://www.fukui-med.jrc.or.jp>
e-mail renkei@fukui-med.jrc.or.jp

連携通信第42号発行
平成24年4月
福井赤十字病院



Partner

Japanese Red Cross Fukui Hospital

福井赤十字病院連携通信

パートナー vol.042

平成24年4月発行



当院のボランティアさんの作品

Topics トピックス

CKD専門外来開設のご案内

福井赤十字病院腎臓・泌尿器科は、total kidney careを目指して日々の診療に従事しております。このうち、腎臓内科グループはCKD治療および教育を1つの診療の柱としてこの2年間研鑽を重ねてきました。その結果、昨年からCKD教育入院を開始することができました。これもひとえに、連携医の先生方のご支援の賜物であります。平成24年4月からは更に人員の増員も果たすことができ、今以上にCKD診療に邁進したいと考えております。

そこでこの度、透析センター内にCKD専門外来として診療室を増設させて頂きました。認定看護師、薬剤師、管理栄養士などの協力も得ながら、更なる充実したCKD診療にあたりたいと考える所存です。連携医の先生方には患者さまのご紹介をこころよりお願い申し上げます。

（腎臓・泌尿器・透析センター センター長 伊藤正典）



福井赤十字病院

理念

人道・博愛の精神のもと、県民が求める優れた医療を行います。

基本方針

- 患者さんの権利と意思を尊重し、協働して医療を行います。
- 安全と質を向上させ、優しい医療を行います。
- 人間性豊かで専門性を兼ね備えた医療人を育成します。
- 急性期医療・疾病予防・災害時医療に積極的に取り組みます。
- 保健・医療・福祉と連携し、地域社会に貢献します。

Global vascular intervention



循環器科部長
坪川 明義

最近、経皮的冠動脈形成術(PCI)を施行する循環器内科医にはglobal vascular interventionという概念が浸透してきています。

PCIは、2004年に日本でも承認された薬物溶出性ステントの登場により、永年の課題であった再狭窄が克服され、狭心症、心筋梗塞などの冠動脈疾患の治療法としては確立されたものとなりました。しかし、高血圧、糖尿病、脂質異常症、喫煙などの生活習慣病に起因する動脈硬化は、冠動脈以外にも脳・頸動脈、腎動脈、下肢動脈などの全身の血管に及んでいることが多く、冠動脈疾患の患者は複数の末梢動脈硬化性疾患を合併する頻度が高くなり、これらの合併が、冠動脈疾患に対する冠血行再建後の予後に悪影響を与えることが

明らかになってきました。このことから、PCIによる冠動脈の血行再建だけではなく、全身の主要な動脈硬化病変を診断評価し、治療の適応を決定することが重要になってきます。また、その治療法もPCIを施行する循環器内科医による技術と近年のバルーンの細小径化、新しいステントの導入などを合わせることによって、血管内治療が外科手術に替わる重要な手技になってきています。

今後は、冠動脈疾患患者の予後改善のために、冠動脈インターベンションだけではなく、積極的に全身の血管インターベンション(global vascular intervention)へ進んでいくことになります。

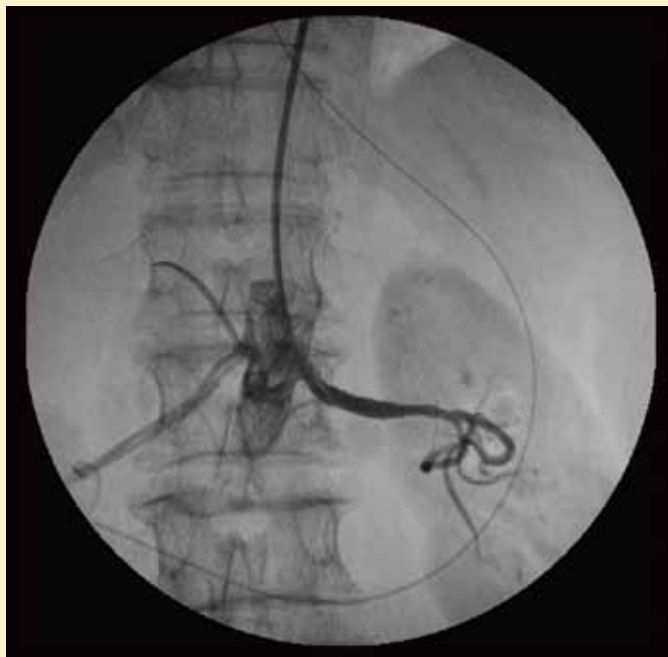
以下に当院で施行したglobal vascular interventionの症例を提示させていただきます。

症例①

77歳の女性。
難治性心不全、高血圧で人工呼吸器管理施行。冠動脈造影では冠動脈に有意狭窄は指摘されず。
腎血管性高血圧を疑い精査施行したところ、左腎動脈狭窄を指摘し、経皮的血管形成術施行した。



右上腕動脈からカテーテルを挿入し、左腎動脈に5-18mmのステント留置した。



症例②

68歳の男性。
狭心症の治療で左右冠動脈に薬物溶出性ステントを用いてPCI施行。その入院中に左下肢のABI低下を指摘され、精査したところ、左外腸骨動脈の完全閉塞を指摘され、ステントを用いた経皮的血管形成術を施行した。



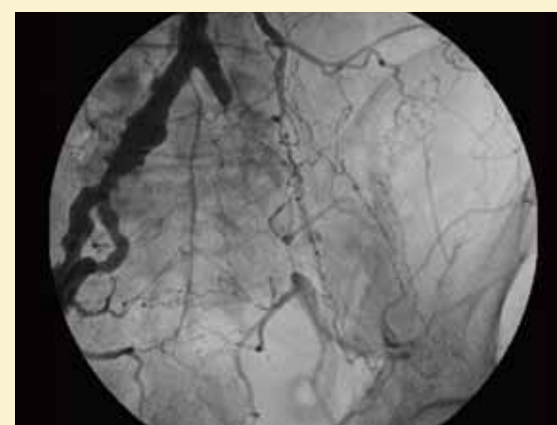
左前下行枝に薬物溶出性ステント 3-15mm 2個留置。



右冠動脈に薬物溶出性ステント 3.5-28mm 2個留置。

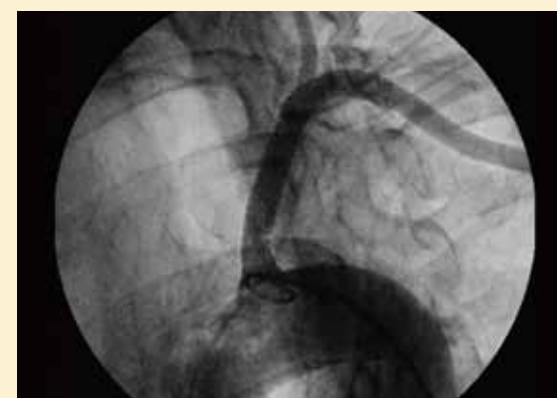


左外腸骨動脈に10-60mm,8-60mmのステント2個留置して血行再建に成功。



症例③

59歳の男性。
血圧の左右差を指摘され、精査施行。左鎖骨下動脈の狭窄を指摘され、経皮的血管形成術を施行した。



右大腿動脈からカテーテルを挿入して血管造影を施行し、左上腕動脈から10-60mmのステントを挿入し、左鎖骨下動脈入口部から留置した。